

平成 1 0 年度試験研究成果

区分	指導	題名	りんどうの夏播き育苗の定植期
〔要約〕夏播き育苗した苗を年内に定植する場合は、6月下旬播きであれば、10月上旬、7月下旬播きであれば9月下旬が晩限である。これらの苗は越冬して定植することも可能であるが晩播限界は、7月下旬である。			
キ-ワ-ド	りんどう	夏播き苗の利用	園芸畑作部 花き研究室

1. 背景とねらい

りんどうの育苗方法は、平成元年以降セル成型育苗法に移行し、各地に灌水装置などの装備を有した施設が導入されている。そこで、こうした育苗施設の効率的利用による良質苗生産と、それに対応した作型の開発が望まれていた。

2. 技術の内容

(1) 夏播き育苗で年内に定植する作型として、6月下旬播きの場合は10月上旬、7月下旬播きの場合は9月下旬が定植の限界である(表1)。

(2) 夏播き育苗で越冬後、翌春植える場合は、排水の良好な場所を選び、高さ10cm程度の平畝を作り、トレ- (大きさ: 538 × 277 × 43mm) を並べ、その上に3~5cmの覆土を行い、凍寒害を防ぐ。

(3) 夏播き育苗した苗を翌春定植すると、その翌年からの収穫となるが、初年度収穫本数は定植年が同じ年次の慣行栽培よりも多くなる(表2)。

(4) 夏播き育苗苗を翌春定植する場合の晩播限界は7月下旬である(表2、3)。

3. 指導上の留意事項

(1) 夏播き育苗では、播種後3週間の管理を確実にし、多灌水、強遮光による下胚軸の徒長や病害の発生に注意する。

(2) 越冬育苗の場合は、育苗期間が長期にわたることになるが、その場合は1週間に1度の追肥は確実に実施する。また、苗が越冬場所でネズミやモグラの食害にあうことはないが、直接苗が寒風にさらされないように、場所の選定に注意する。

(3) 夏播き苗の作期の設定に当たっては、地域や個別農家の作業形態によって、秋定植、春定植いずれも選択できるが、越冬させた場合の苗のロス率は5~11%程度である。

(4) 本試験は、株の肥大が遅いマシリイを供試し、200穴のセルトレ-を用いて実施しており、この成果は他の品種にも応用できる。

4. 技術の適応地帯

県中南部(多雪地帯を除く)

5. 当該事項に係る試験研究課題

3-1-(1)-ウ-(ア) りんどうの高品質安定性産技術の開発
a りんどうの株養成期間短縮栽培法の確立

6. 参考文献・資料

7. 試験成績の概要

表 1 夏播き秋定植苗の生育

は種日 (月日)	定植日 (月日)	定植時の苗育 成率(%)	H10 春の生 存率(%)	H10 秋の越冬芽の形成数(本/株)			
				2mm 未満	2 ~ 4mm	4mm 以上	合計
H9.6.25	H9.9.15	98.2	100.0	5.32	3.21	2.33	10.86
	H9.10.1	98.2	94.3	4.62	2.31	1.04	7.97
	H9.10.15	97.7	95.0	4.33	2.35	0.83	7.51
	H9.11.1	95.5	26.4	-	-	-	-
7.25	H9.10.1	93.9	80.1	2.04	2.87	0.21	5.12
	H9.10.15	94.7	64.3	- ¹⁾	-	-	-
	H9.11.1	94.9	21.9	-	-	-	-
8.20	H9.10.15	68.5	-	-	-	-	-
	H9.11.1	68.5	-	-	-	-	-
H9.3.27 (慣行)	H9.7.5	94.8	100.0	3.33	5.54	4.67	13.54

注 1) - は、苗育成率や生存率の低下から、実用性が無いと判断して調査を中止した。

表 2 夏播き春定植苗の生育

は種日 (月日)	定植日 (月日)	定植時の苗育 成率(%)	株当たり収穫本数 ¹⁾		H10 越冬芽の形成数(本/株)			
			H 9	H10	2mm 未満	2 ~ 4mm	4mm 以上	合計
H8.7.25	H9.5.4	94.8	0	1.46	4.21	5.36	6.12	15.69
8.20	H9.5.4	63.7	- ²⁾	-	-	-	-	-
9.9	H9.5.4	43.1	-	-	-	-	-	-
H9.3.27 (慣行)	H9.7.5	94.9	0	0.74	3.33	5.54	4.67	13.54
H9.6.25	H10.4.25	90.3	0	0	4.01	1.65	0.65	6.31
	7.25	H10.4.25	89.0	0	0	3.85	1.21	0.49
8.20	H10.4.25	63.2	-	-	-	-	-	-

注 1) 経済連規格 M品以上のもの

2) - は、苗育成率や生存率の低下から、実用性が無いと判断してして調査を中止した。